

展示を見ながら 5分で分かる！ 寺町廃寺跡の「ここがポイント」①

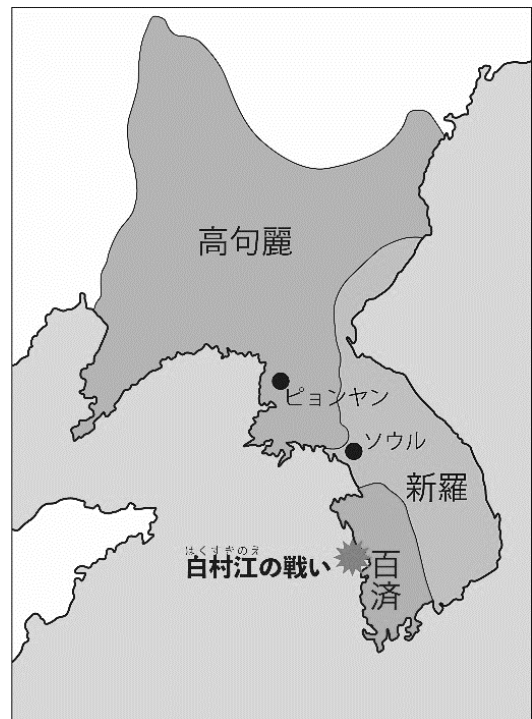
およそ1,200年前のお話に登場？！

平安時代の初め頃に編纂された『日本霊異記』という仏教説話集に、備後国の三谷郡（現在の三次市南部）にあった「三谷寺」というお寺の話が登場します。

『日本霊異記』に登場する三谷寺の内容		寺町廃寺跡の発掘調査・研究の成果	
お寺を建てた人物・時期・目的	人物：三谷郡の大領(長官)の先祖 時期：白村江の戦(663年)後 目的：白村江の戦いから生還できたことに対する神仏へのお礼	建てられた時期	7世紀第3四半期の後半 (663年～675年) 白村江の戦い後の20・30年
中心となった人物	百済から招かれた弘済という僧侶	建築技術 ・ 出土資料	<ul style="list-style-type: none"> 中国や百済の土木技術を採用した基礎工事 百済の工法の可能性のある建物の基壇 百済の瓦とのつながりがある瓦

「この話に出てくる三谷寺は、寺町廃寺跡のことではないか？」とする研究が100年以上にわたって続けられてきましたが、この度三次市教育委員会によって行われた発掘調査やその成果の研究によって、寺町廃寺跡 = 三谷寺の可能性が極めて高くなりました。その根拠となるキーワードは「白村江の戦い」と、かつて朝鮮半島にあった「百済」です。

つまり、寺町廃寺跡は、建てられた由来が説話と言う史料によって分かる極めて貴重な古代寺院跡なのです。



白村江の戦いの場所と、朝鮮半島の三国

(※ピョンヤン・ソウルは現在の地名)

※白村江の戦い

663年に朝鮮半島の錦江湾で、百済と日本の連合軍が唐・新羅の連合軍と戦って大敗を喫した戦いです。百済王族の要請を受けた日本は、合計3万2千人の大軍を派兵したともいわれます。

敗戦によって百済の滅亡は決定的となり、日本にとっては中央集権体制に基づく強固な国家の建設に拍車をかけるきっかけとなりました。

先進的な外来の建築技術を導入！

金堂の建物を支える基壇は、土を交互に積み重ねて突き固める「版築」と呼ばれる工法で築かれていました。この工法は中国や百済の工法と言われ、日本では都の周辺地域の寺院で多く用いられています。寺町廃寺跡の造営に外来の先端技術が導入されたことが分かります。

※版築工法

地盤を強固にする土木技術で、種類の異なる土を何層も重ねて突き固める工法です。建物の基礎や堤防などの建設に用いられました。

写真は金堂基壇の断面の様子です。写真の中央に見られる何本もの線は土層の違いを示すもので、厚みが薄い土層が幾重にも重なっていることから、土を重ねる度に突き固めた様子が分かります。



(三次市教育委員会提供)

また、金堂や塔の基壇は、基壇を取り囲む面の一番下に、広い面を外側に向けて罫を立て並べ、その上に罫や瓦を積み上げる工法で構築されています。

こうした構築方法は国内には例はなく、百済など外来の工法の可能性があるとして注目されています。



※基壇の外装

金堂北面の基壇の様子です。一番下に罫を立て並べ、その上に瓦を積み重ねている様子が分かります。

(三次市教育委員会提供)

展示を見ながら 5分で分かる！ 寺町廃寺跡の「ここがポイント」②

詳細に設計手法を検討できる！

寺町廃寺跡は、建物跡などの保存状態が良く、全国で60か所確認されている法起寺式の古代寺院跡の中では、一つ一つの建物や伽藍の配置などを詳細に検討できる唯一の古代寺院跡と言われます。

その具体的な例は、次のとおりです。

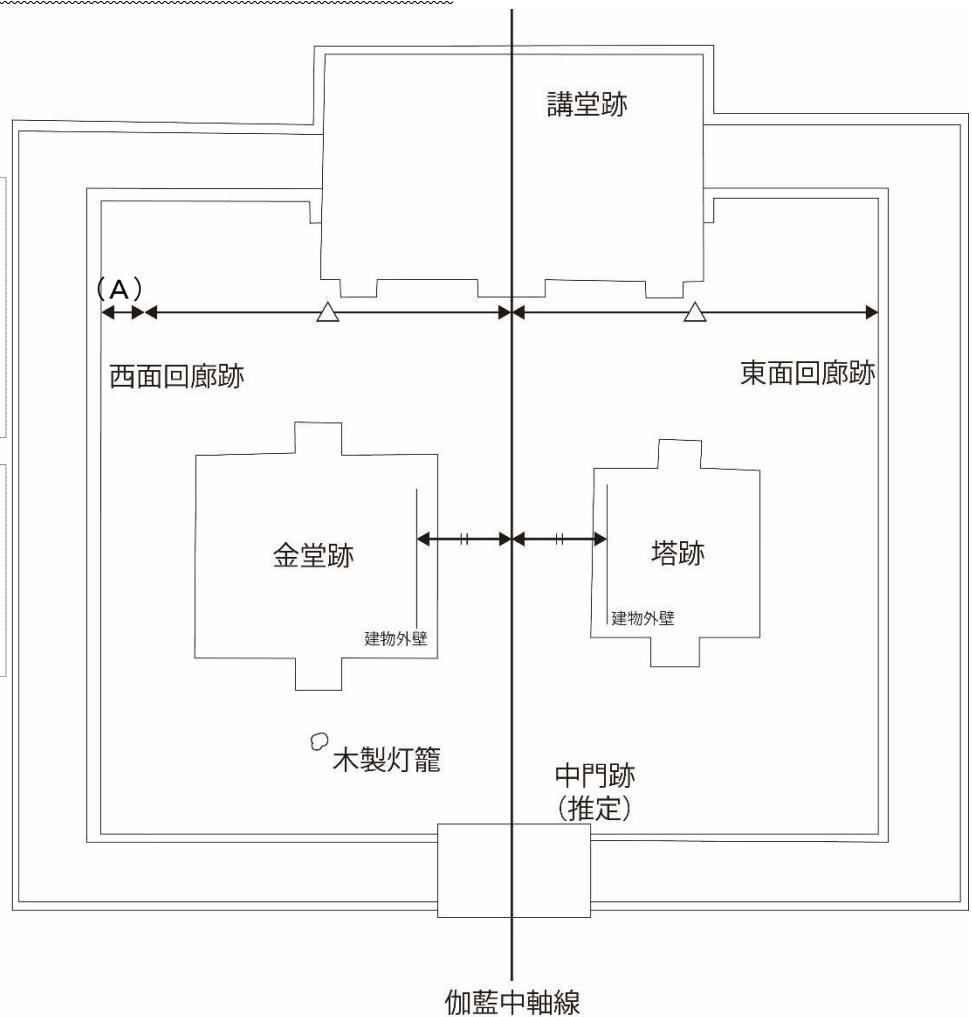
リアルタイムで採用された、法隆寺と同様の設計手法

寺町廃寺跡の伽藍設計は、図のように、伽藍中軸線から左右同じ距離になる位置に、金堂と塔の壁が位置する設計になっています。また、塔よりも規模が大きな金堂側の回廊を、塔側の回廊よりも一間分（柱と柱の間隔）ほど外に広げた位置に配置した設計です。このような設計によって、中門を入り中軸線上から講堂を見た時の、塔・金堂・回廊の視覚的なバランスを創り出しているのです。

こうした設計手法は法隆寺西院伽藍と同様のもので、670年の焼失に伴う法隆寺の再建に採用された設計手法が、ほぼ同時期に創建された寺町廃寺跡にも採用されていたことが分かります。

伽藍中軸線から回廊までの距離を、西面回廊側の方だけ一間分(A)長くして、見た目のバランスを創り出している。

塔と金堂の建物外壁の中間点を伽藍の中軸線にして、見た目の中心性を創り出している。



伽藍配置の設計手法

寺院の中心が塔から金堂へと変化

古代寺院の伽藍を構成する代表的な建物は塔・金堂・講堂で、本来は、釈迦の遺骨（仏舎利）を納めた塔（仏塔・ストゥーパ）が重要なものとして中心を占めていました。

しかし、次第に建物の重要性が変化し、伽藍配置は次のように変遷したと言われます。

① <仏教が伝来した6世紀中頃から後半>

釈迦の遺骨を祀る塔を中心として金堂を配置しその背後に講堂を置く。（飛鳥寺式，四天王寺式）



② <寺院が地方に広がり始める7世紀前半から中頃>

仏像を安置して儀式を行う金堂の重要性が増大し塔と金堂を並列して配置。（法起寺式，法隆寺式）



寺町麩寺跡の創建！

③ <藤原京が造営された7世紀後半以降>

金堂を最も重視して中心に配置。（川原寺式）



④ <平城京が造営された奈良時代>

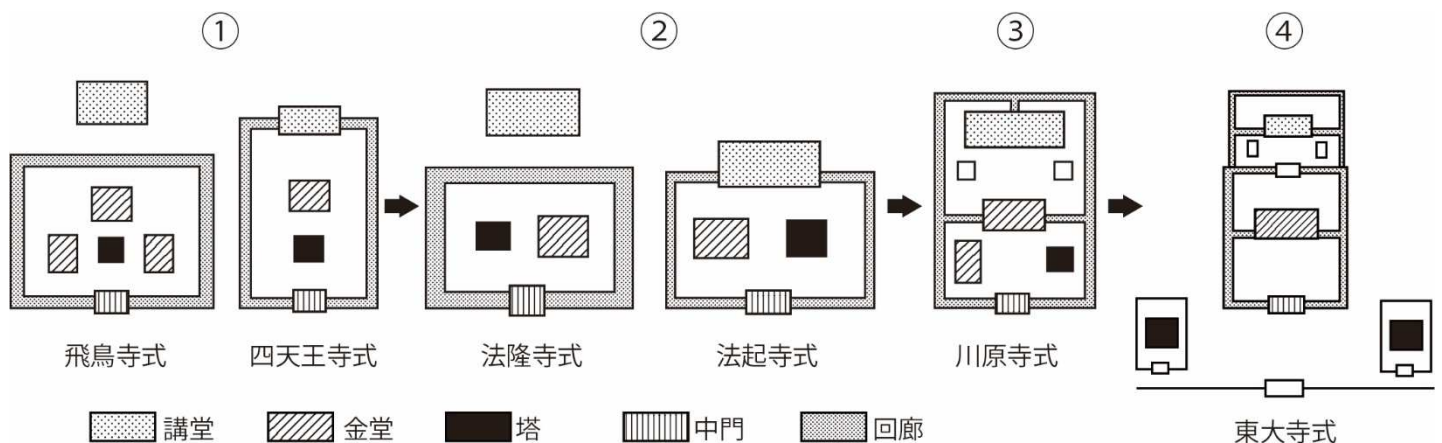
塔が回廊の外に出され、金堂とその前庭の儀式空間を中心に配置。（東大寺式）

伽藍配置の面からは、法起寺式である寺町麩寺跡は、②の段階の伽藍配置とすることができます。

しかし、建物の重要性を表す基壇の高さに注目すると、金堂が約1.8m、塔が1.35m、講堂が0.6mであることから、一番高さのある金堂が最も重要な建物として位置付けていたことが分かり、これは金堂を最も重視した③の段階に向かう「予兆」と言うことができます。

その一方で、基壇の北側に取り付けられた階段に注目すると、塔・金堂ともに基壇からの出が2.0mと同規模の立派な階段であり、これは塔・金堂ともに重要視された②の段階の「名残」と言うことができます。

つまり、寺町麩寺跡は、金堂の重要性が増大して塔と並列される②の段階の伽藍配置でありながら、金堂が中心的なものとなる③の段階へ移行する過渡期の寺院跡であるということが読み取れるのです。



古代寺院の伽藍配置の変化